日本西門 鎮守八幡宮

御由緒

今の赤間神宮が明治維新までは、阿弥陀寺と言って、安徳天皇をまつる御影堂を中心とした勅願寺でありましたが、この阿弥陀寺が、その昔、行教（ぎょうきょう）という、高名な和尚さまによって、今からおよそ千二百年も前の貞観二年（八六〇）、大分県の宇佐八幡宮から御分霊をいただいて、ここ下関の地に創建され、阿弥陀寺の本堂から東北（鬼門）に位置する場所を選んで、この御分霊をおまつりし、日本の西の入口をお守りする八幡宮であるという意味をこめて、その御社号も、「日本西門鎮守八幡宮（にっぽんさいもんちんじゅはちまんぐう）」と尊称されることになったものと伝えられております。また、阿弥陀寺を守護する氏神でもあることから、奈良東大寺（今の手向山八幡宮）と同じように、阿弥陀寺八幡宮とも呼ばれていたことが、古文書古記録類に記されております。

以来、御神徳は日に月に高まり、御神威の偉大なることは、先づ神功皇后の時代にあらわれ、日本は外敵に侵されてはならないとの託宣を蒙りました。次いでは源平合戦の時に、源氏の大将が宿願をこめますと、天から白旗が舞い降りて勝利を得たと伝えられ、さらに、文永・弘安の役、いわゆる蒙古襲来の時には、御本殿の御扉が自然に開き、神様が光る玉になって海へ向い、神風を吹かせて蒙古軍を滅ぼす等、不思議な御霊験（しるし）が次々にあらわれ、ひとり地域の氏神にとどまらず、まさに日本の西門、西の玄関口である関門を鎮護する神としての御神威が発動されているのです。

鎮守八幡宮略誌
（昭和五十七年発行）

七月二十九日　夏越祭（なごしさい）

日本西門鎮守八幡宮の祭事は年間を通し、歳旦祭、節分祭、夏越祭、秋季大祭（敬老祭）と四回催されます。特に夏越祭は、暑い夏を恙なく過せる様にと前日の二十八日早朝より氏子の有志が茅刈りに行き、古老の指導のもと茅の輪をつくります。二十九日は御神輿の準備を済ませ、十一時より神事の後、神前に宮司・神職と氏子が向い合せに整列し、

水無月の夏越しの祓いする人は千歳の命のぶと言ふなり

と二度唱え、宮司、神職、氏子会長、総代、氏子、参列者と二列となって茅の輪を三度八の字を描きながらくぐります。

コロナ禍のため今年で三年中止となりましたが、本来なら、この後、御神幸に御神輿をかついで出発します。本町、壇之浦、みもすそ川、本町、ガス会社、養治小学校、宮田町マックスバリュ、阿弥陀寺と氏子の町内を一周し、要所々々で稚児神楽を奉納し、御神輿を担ぐ若者には飲物が振る舞われ賑々しく夕方四時ごろには無事に八幡宮に帰還して、還御祭を執り行いました。その後、休む間もなく夜の神賑行事です。玉替えに始まり、夜店は、婦人部と有志により、生ビール、やきそば、かき氷等、子ども向けのゲームがあり、神楽殿ではマジックショー、バナナのたたき売り、平家太鼓等が企画され八時半頃には、すべての行事が終り、掃除に片づけです。引き続き直会です。家に帰り疲れた身体を休めます。二・三日身体が痛みます。しかし、どんなに疲れようとお祭りに参加した人、夜の行事を楽しんだ人達のことを思うと満足感で一杯です。

三年間この様な行事が途絶えたことは残念でなりませんが、来年こそはと願っております。

神社は、産土（土地）の神様です。そこに住まわれている方が、無事に過ごせるよう守って下さるのです。氏子がすることは、神様（自然）に感謝することです。氏子が感謝することにより、より神様（自然）から御神徳を頂けます。それが、良い循環となり、神様（自然）と氏子が共に発展していきます。日本建国以来、二六〇〇年以上続く、慣習であります。

年間祭事の斎行を通して、日本西門鎮守八幡宮を御守りし、後継者に繋いでいくのが我々のつとめです。